

「保育発表会」への学生の取り組みについての一考察 三年制から二年制への移行期における認識の比較

本山 芳男

A Study of the student's commitment to "childcare recital"
Comparison of recognition in the transition period from three-year to two-year

Yoshio MOTOYAMA

A 専門学校は、当初三年制の保育士養成校としてスタートし、昨年度より諸般の事情により二年制として再スタートを切った。そのなかで当初から学生主体の「保育発表会」が行われている。その「保育発表会」に対して、2013, 2014年度と移行期の学生の認識を比較したところ、両年度とも「子どもたちが喜んでくれてうれしかった」「このような取り組みは大変だけど、保育士になりたい」という認識と2014年度に入学した学生は、他の学年と異なり「次年度はやりたくない」という認識を示していた。本稿では、二か年における学生の認識を比較することで、「保育発表会」の学生にとっての意味を考察する。

I はじめに

A 専門学校が、三年制の保育科を設置してから2014年度で12年になる。そして当初から学生主体のもとに「保育発表会」を行ってきた。これは日ごろの講義や演習などをおして学んできたこと踏まえ、自分たちでテーマを決め計画し、地域子ども達に劇や歌を披露するというものである。

もともとの取り掛かりの契機は、学生から自発的に提案されたというより、将来保育士として現場に出る学生にとって、学生のうちから計画、立案、実施することを経験することに意味があるという思いのもとに教員より提案されたものと思われる。

そしてA 専門学校の保育科は、近年の保育士不足という様々な社会情勢から2013年度から2年制の保育科として再スタートした。2年制に移行しても3年制と同様に、保育士資格取得のために12日90時間の保育実習を3回、そしてその他に幼稚園教諭の資格を取る学生は、10日の教育実習を2回行っている。そのなかで「保育発表会」を行うことは、3年制の学生よりもその負担は大きいといえる。

そのために本稿では、2年制に移行した2013年度そして2014年度の2か年に亘っての「保

育発表会」の学生の認識を把握し、学生にとっての利益という点で「保育発表会」や今後の取り組みへの支援について考察する。

Ⅱ 方法

1 対象数

2013年度、2014年度の対象は表1のとおりである。2013年度の1年生、2年生は2014年度においてそれぞれ2年、3年生に該当する。

表1 対象数

		学年	2014年度
学年	2013年度	1	32名
1	34名	2	35名
2	23名	3	24名
3	22名	計	91名
計	79名		

2 実施時期

(1) 2013年度調査

2013年12月20日（保育発表会12月7日）

(2) 2014年度調査

2014年12月8日（保育発表会12月6日）

3 学生の認識の把握

資料1の「保育発表会」アンケートにより学年ごとに実施する。

Ⅲ 結果

1 質問1 【あなたの「保育発表会」に参加した感想について】の回答肢は以下のものであった。

- ア 見に来てくれた子どもたちが喜んでくれてうれしかった
- イ 忙しさだけのものだった
- ウ クラスがひとつにまとまったこと
- エ 特に何も残らなかった
- オ その他

(1) 2013年度調査 (以下, 2013調査とする)

表2は質問1【あなたの「保育発表会」に参加した感想について】の調査結果を示したものである。2013調査結果において、イ (忙しさだけのものだった)、ウ (クラスがひとつにまとまれたこと)、エ (特に何も残らなかった)、オ (その他)への回答数が少ないため、ア (見に来てくれた子どもたちが喜んでくれてうれしかった) とウ (クラスがひとつにまとまれたこと) の回答数をとりあげたものが表3である。

2013調査におけるア、ウに関して全学年の回答差を χ^2 検定したところ、5%水準で有意差があり、“子どもたちの喜ぶ姿”を見てうれしいと回答している ($\chi^2 = 21.7$ df = 1 p < .05)。

次にこのアと回答した学年間の回答差をみるために χ^2 検定したところ、5%水準で有意差がなかった。 ($\chi^2 = 0.23$ df = 2 N.S.)。このことは、学年に関係なく「保育発表会」について “子どもたちの喜ぶ姿” を見てうれしいと回答している。

(2) 2014年度調査 (以下, 2014調査とする)

2014調査において (1) と同様にア、ウについて χ^2 検定をしたところ、5%水準で有意差があり、“子どもたちの喜ぶ姿”を見てうれしいと回答している ($\chi^2 = 34.72$ df = 1 p < .05)。

同様に2014調査においてアと回答した学年間の差をみるために χ^2 検定したところ、5%水準で有意差がなく、2013年調査と同様の傾向を示していた。 (χ^2 検定 = 0.96 df = 2 N.S.)。

表2 質問1「保育発表会」の感想

2013調査								2014調査							
学年	ア	イ	ウ	エ	オ	無回答	計	学年	ア	イ	ウ	エ	オ	無回答	計
1	21	0	10	0	0	3	34	1	21	4	0	1	4	2	32
2	14	2	0	1	3	3	23	2	24	0	5	2	4	0	35
3	15	2	3	0	2	0	22	3	16	1	6	1	0	0	24
計	50	4	13	1	5	6	79	計	61	5	11	4	8	2	91

表3 質問1の2013調査, 2014調査 (ア, ウ)

2013調査				2014調査			
学年	ア	ウ	計	学年	ア	ウ	計
1	21	10	31	1	21	0	21
2	14	0	14	2	24	5	29
3	15	3	18	3	16	6	22
計	50	13	63	計	61	11	72

2 質問3【4月から開催当日の間、「保育発表会」に対する気持ちの変化について】の回答肢は以下のものであった。

- ア はじめからやる気があった
- イ はじめからやる気がなかった
- ウ 途中からやる気が出てきた
- エ 特に役はなかった
- オ その他

表4は、質問3【4月から開催当日の間、「保育発表会」に対する気持ちの変化について】の調査結果である。表5は2013調査において、イ（はじめからやる気がなかった）、エ（特に役はなかった）、オ（その他）の回答数が少なかったため、ア（はじめからやる気があった）とウ（途中からやる気が出てきた）を、2014調査においてはエ、オの回答数が少なかったため、ア、イ、ウの回答数をとりあげたものである。

（1）2013調査

2013調査における全学年のアとウの回答差をみるために χ^2 検定したところ、5%水準で有意差があり、「途中からやる気が出てきた」学生が多いことを示している（ $\chi^2 = 7.78$ df=1 p<.05）。

学年間でアの回答差をみるために χ^2 検定したところ、5%水準で有意差があり、学年が高くなるにつれ「はじめからやる気があった」ことを示している（ $\chi^2 = 9.18$ df=2 p<.05）。

また、「途中からやる気が出てきた」に関して、学年間のウの回答差を χ^2 検定したところ、5%水準で有意差がなく、学年間で取り組みに違いがないことを示している（ $\chi^2 = 5.50$ df=2 N.S.）。

（2）2014調査

表4の2014調査における全学年のア、イ、ウの回答差をみるために χ^2 検定したところ、5%水準で有意差があり、ア、ウと回答した学生が多かった（ $\chi^2 = 23.21$ df=2 <.05）。

さらにア、ウの回答差をみるために χ^2 検定したところ、5%水準で有意差はなかった（ $\chi^2 = 3.03$ df=1 N.S.）。

学年間でのアの回答差をみるために χ^2 検定したところ、5%水準で有意差があり、学年が高くなるにつれ「はじめからやる気があった」という学生が多いことを示している（ $\chi^2 = 12.63$ df=2 <.05）。

同様に学年間でのウの回答差をみるために χ^2 検定したところ、5%水準で有意差がなく、学年間による差は見られなかった（ $\chi^2 = 1.97$ df=2 N.S.）。

「保育発表会」への取り組みについて、統計的に多くの学生が取り組みへの構えを取っていることを示しているが、「はじめからやる気があった」という構えを取る学生の学年は、1年生より3年生が高く、「途中からやる気が出てきた」という構えに関しては、学年間に差がないことを示している。

表4 質問3「保育発表会」に対する気持ちの変化

2013調査								2014調査							
学年	ア	イ	ウ	エ	オ	無回答	計	学年	ア	イ	ウ	エ	オ	無回答	計
1	4	0	28	0	0	2	34	1	2	6	19	0	3	2	32
2	7	1	14	0	0	1	23	2	17	1	16	0	0	1	35
3	14	0	7	0	1	0	22	3	14	1	8	0	0	1	24
計	25	1	49	0	1	3	79	計	33	8	43	0	3	4	91

表5 質問3の2013調査（ア、ウ）、2014調査（ア、イ、ウ）について

2013調査				2014調査				
学年	ア	ウ	計	学年	ア	イ	ウ	計
1	4	28	32	1	2	6	19	27
2	7	14	21	2	17	1	16	34
3	14	7	21	3	14	1	8	23
計	25	49	74	計	33	8	43	84

3 質問4【自分のチームが発表しているときの気持ちについて】の回答肢は以下のものであった。

ア みんなに見てもらってうれしかった

イ チームの一体感を感じた

ウ つまらなかった

エ 何も感じなかった

オ その他

表6は、質問4【自分のチームが発表しているときの気持ちについて】の結果を示したものである。表7は、2013調査において、ウ（つまらなかった）、エ（何も感じなかった）、オ（その他）への回答数が少なかったため、2014調査もそれに合わせア（みんなに見てもらってうれしかった）とイ（チームの一体感を感じた）をとりあげたものである。

（1）2013調査

2013調査における全学年のアとイの回答差を χ^2 検定したところ5%水準で有意差はなかった($\chi^2 = 0.55$ df=1 N.S)。また、1年生に関してア、イの回答差を χ^2 検定したところ、5%水準で有意差はなかった ($\chi^2 = 2.13$ df=1 N.S)。

アに関して学年間での回答差を χ^2 検定したところ、5%水準で有意差はなかった ($\chi^2 =$

1.18 $df = 2$ N.S)。

(2) 2014調査

2014調査における全学年のアとイの回答差を χ^2 検定したところ、5%水準で有意差はなかった($\chi^2 = 1.77$ $df = 1$ N.S)。

また、アに関して学年間での回答差を χ^2 検定したところ、5%水準で有意差はなかった($\chi^2 = 3.22$ $df = 2$ NS)。

表6 質問4「保育発表会」時に対する気持ち

2013調査								2014調査							
学年	ア	イ	ウ	エ	オ	無回答	計	学年	ア	イ	ウ	エ	オ	無回答	計
1	11	19	0	0	3	1	34	2	8	19	1	0	4	3	35
2	8	9	1	1	3	1	23	3	11	12	0	1	0	0	24
3	11	8	0	0	2	1	22	計	31	43	1	1	9	6	91
計	30	36	1	1	8	3	79								

表7 質問4の2013調査, 2014調査(ア, イ)について

2013調査				2014調査			
学年	ア	イ	計	学年	ア	イ	計
1	11	19	30	2	8	19	27
2	8	9	17	3	11	12	23
3	11	8	19	計	31	43	74
計	30	36	66				

4 質問5【「保育発表会」終了後の気持ち】の回答肢は以下のものであった。

ア もう一度やりたい(来年度もやった方がいい)

イ 今回は楽しかったが、来年はやりたくない

ウ 「やりたい」「やりたくない」どちらとも言えない

エ その他

表8は、質問5【「保育発表会」終了後の気持ち】の結果を表したものである。表9は、2013調査において、エ(その他)への回答数が少なかったため削除し、ア(もう一度やりたい(来年度もやった方がいい))、イ(今回は楽しかったが、来年はやりたくない)、ウ(「やりたい」「やりたくない」どちらとも言えない)で作表し、2014調査もそれに合わせたものである。

(1) 2013調査

2013調査における全学年のア、イ、ウの回答差を χ^2 検定したところ、5%水準で有意差はなかった($\chi^2 = 4.89$ df=2 N.S.)が、学年ごとに回答差をみたところ、1年生に5%水準で有意差があり、ウの(「やりたい」「やりたくない」どちらとも言えない)への回答が多かった($\chi^2 = 6.70$ df=2 p<.05)。

2年生のア、イ、ウの回答差に関しては、5%水準で有意差はなかった($\chi^2 = 2.00$ df=2 N.S.)。

3年生に関してイの回答が0だったために、ア、ウ間の回答差を χ^2 検定したところ、5%水準で有意差があり、「もう一度やりたい(来年度もやった方がいい)」という回答が多かった($\chi^2 = 5.00$ df=1 p<.05)。

アに関して学年間での回答差を χ^2 検定したところ、5%水準で有意差があり、3年生は、「もう一度やりたい(来年度もやった方がいい)」と回答していた($\chi^2 = 6.91$ df=2 p<.05)。

イに関して学年間の回答において5%水準で有意差があり、1、2年生に「今回は楽しかったが、来年はやりたくない」という回答が多かった($\chi^2 = 8.50$ df=2 p<.05)。

ウに関して学年間の回答において、5%水準で有意差があり、1年生に「どちらともいえない」という回答が多かった($\chi^2 = 6.24$ df=2 p<.05)。

(2) 2014調査

2014調査における全学年のア、イ、ウの回答差を χ^2 検定したところ、5%水準で有意差はなかった($\chi^2 = 3.95$ df=2 N.S.)。

また、アに関して学年間での回答差を χ^2 検定したところ、5%水準で有意差がなく、「もう一度やりたい(来年度もやった方がいい)」という回答に学年間の差はなかった($\chi^2 = 4.60$ df=2 N.S.)。

イに関して学年間の回答に5%水準で有意差があり、1年生に「今回は楽しかったが、来年はやりたくない」という回答が多かった($\chi^2 = 7.82$ df=2 p<.05)。

ウに関して学年間の回答において5%水準で有意差がなかった($\chi^2 = 0.85$ df=2 N.S.)。

表8 質問5「保育発表会」終了後の気持ち

2013調査							2014調査						
							学年	ア	イ	ウ	エ	無回答	計
学年	ア	イ	ウ	エ	無回答	計	1	6	12	11	1	2	32
1	8	7	18	0	1	34	2	17	2	13	3	0	35
2	8	9	4	0	2	23	3	11	6	4	3	0	24
3	15	0	5	2	0	22	計	34	20	28	7	2	91
計	31	16	27	2	3	79							

表9 質問5の2013調査, 2014調査(ア, イ, ウ)について

2013調査					2014調査				
学年	ア	イ	ウ	計	学年	ア	イ	ウ	計
1	8	7	18	33	1	6	12	11	29
2	8	9	4	21	2	17	2	13	32
3	15	0	5	20	3	11	6	4	21
計	31	16	27	74	計	34	20	28	82

(5) 質問6 【あなたにとっての「保育発表会」はどんな意味】の回答肢は以下のものであった。

ア 仲間と一緒に取り組めたこと

イ 自分が楽しめたと思う

ウ あまり意味がない

エ わからない

オ その他

表10は、質問6 【あなたにとっての「保育発表会」はどんな意味】の結果を示したものである。イ（自分が楽しめたと思う）、ウ（あまり意味がない）、エ（わからない）、オ（その他）への回答数が少ないため、ア（仲間と一緒に取り組めたこと）について学年間に回答差を χ^2 検定したところ、2013, 2014調査ともに5%水準で学年間の有意差はなかった（2013調査： $\chi^2 = 0.31$ df=2, 2014調査： $\chi^2 = 0.29$ df=2 いずれもN.S.）。

表10 質問6 自分にとっての「保育発表会」の意味

2013調査								2014調査							
学年	ア	イ	ウ	エ	オ	無回答	計	学年	ア	イ	ウ	エ	オ	無回答	計
1	30	2	0	1	0	1	34	1	24	2	2	4	0	0	32
2	17	1	1	2	1	1	23	2	27	2	2	1	0	3	35
3	18	1	0	3	0	0	22	3	21	1	1	1	0	0	24
計	65	4	1	6	1	2	79	計	72	5	5	6	0	3	91

6 質問7 【他学年の人から影響】の回答肢は以下のものであった。

ア 強く受けた

イ 少し受けた

ウ 受けなかった

エ どちらとも言えない

表11は、質問7【他学年の人から影響】の結果を示したものである。表12は2013調査において回答数の少なかったウ（受けなかった）を削除したものである。

(1) 2013調査

2013調査において、ア（強く受けた）、イ（少し受けた）、エ（どちらとも言えない）の回答差を χ^2 検定したところ、5%水準で有意差があり、全学年共に他学年から強く影響を受けていることを示している（ $\chi^2 = 59.6$ df = 2 p < .05）。

また、アに関して、学年間での回答差を χ^2 検定したところ、5%水準で学年間の有意差はなく、全ての学年が他学年から強く影響を受けていることを示している（ $\chi^2 = 1.15$ df = 2 N.S.）。

(2) 2014調査

2014調査において、ア、イ、ウ、エの回答差を χ^2 検定したところ5%水準で有意差があり、他学年から強く影響を受けていることを示している（ $\chi^2 = 41.7$ df = 3 p < .05）。

また、アに関して学年間での回答差を χ^2 検定したところ、5%水準で学年間の有意差はなく、全ての学年が他学年から強く影響を受けていることを示している（ $\chi^2 = 3.43$ df = 2 N.S.）。

表11 質問7 他学年からの影響

2013調査							2014調査						
学年	ア	イ	ウ	エ	無回答	計	学年	ア	イ	ウ	エ	無回答	計
1	26	5	0	2	1	34	2	17	7	5	6	0	35
2	13	5	1	3	1	23	3	8	7	1	5	3	24
3	18	1	0	3	0	22	計	47	20	7	14	3	91
計	57	11	1	8	2	79							

表12 質問7の2013調査（アイエ）と2014調査（アイウエ）について

2013調査					2014調査					
学年	ア	イ	エ	計	学年	ア	イ	ウ	エ	計
1	26	5	2	33	2	17	7	5	6	35
2	13	5	3	21	3	8	7	1	5	21
3	18	1	3	22	計	47	20	7	14	88
計	57	11	8	76						

7 質問8【「保育発表会」を終えた今、保育士になることへの思い】の回答肢は以下のものであった。

ア ますます保育士になりたい気持ちが強くなった

イ 保育士になるには実践力が必要だと改めて思ったが、保育士になりたい

ウ 大変なことがわかったので、保育士になりたくない

エ その他

表13は、質問8【「保育発表会」を終えた今、保育士になることへの思い】の結果を示したものである。

(1) 2013調査

2013調査において、ア（ますます保育士になりたい気持ちが強くなった）とイ（保育士になるには実践力が必要だと改めて思ったが、保育士になりたい）の回答差をみるために χ^2 検定したところ、5%水準で有意差があり、保育発表会の経験をとおして保育士になりたいという気持ちを強く持ったことを示している（ $\chi^2 = 43.21$ df = 1 p < .05）。

イに関して学年間での回答差を χ^2 検定したところ、5%水準で学年間の有意差がないことを示している（ $\chi^2 = 1.54$ df = 2 N.S.）。

(2) 2014調査

2014調査において、アとイの回答差を χ^2 検定したところ、5%水準で有意差があり、保育発表会の経験をしたのちに保育士になりたいという気持ちを強く持ったことを示している（ $\chi^2 = 42.19$ df = 1 p < .05）。

イに関して学年間での回答差を χ^2 検定したところ、5%水準で学年間の有意差はなかった（ $\chi^2 = 0.65$ df = 2 N.S.）。

表13 質問8「保育発表会」を終えた今、保育士になることへの思い

2013調査							2014調査						
							学年	ア	イ	ウ	エ	無回答	計
学年	ア	イ	ウ	エ	無回答	計	1	2	26	3	1	0	32
1	1	30	0	2	1	34	2	2	26	1	6	0	35
2	0	14	0	6	3	23	3	6	15	1	1	1	24
3	5	15	0	1	1	22	計	10	67	5	8	1	91
計	6	59	0	9	5	79							

8 質問9【先輩から後輩への提言（メッセージ）】

以下は自由記述での記載されたものを集約する形でのものである。

(1) 2013調査

① 1年生

準備などで大変だけど、準備は早めにやるといい。そして仲間と協力することで一体感が生まれ、楽しいものになる。

② 2年生

早めに、そして計画的に取り組むといい。団結力が強まり、楽しいし、達成感も味わえる。

③ 3年生

意見を出し合っていくといいもの出来る。準備が大変で、クラスの中がぎくしゃくすることもあるけど、それを乗り越えると達成感も味わえるし、何よりも将来の保育士としての役に立つ。

(2) 2014調査

2014年調査

① 1年生

早めに「保育発表会」についての理解をし、みんなで話し合い、協力すること、計画的に進めていくことが大切。

② 2年生

二年制のなかでやるのは大変、特に来年は先輩が誰もいない状況なので協力して頑張ってもらいたい。準備は早めに計画的にするといい。

③ 3年生

実践が少ない授業の中で自分たちの力が試せる。みんなのイメージを一つにし、協力して早めに取り組むといい。

Ⅳ 考察

学生が「保育発表会」をどのように認識しているかを以下に考察していくこととする。

① 質問1 【あなたの「保育発表会」に参加した感想について】に関しては、2013、2014調査共に「保育発表会」についてどこに力点を置いているかを見ようとするものである。その結果、2013、2014調査共に学年に関係なく、多くの学生が、子ども達が自分たちの発表したことを喜んでくれ、そのことを良かったと思っていた。この質問の回答肢の中には、「クラスがまとまったこと」というものがあり、後の質問（質問3）の中にもこれと同義の回答肢もあるが、最初の質問において、統計的に多くの学生が、「子どもが喜んでくれたこと」そのことをうれしいと回答することに意味があると思われる。

確かに「保育発表会」は準備段階で長時間を要し、仲間との協力や議論もあり、その中で仲間としての連帯感も生まれる。そのことも大事なことであるが、それよりも子どもの喜びを第一とすることは、保育士になろうとする者にとって大切なことであると思われる。

その理由として、自分たちが子どもの前で行うこと（子ども達への刺激）が、目の前にいる子どもの笑顔（反応）をもたらし、その子ども達の反応が学生にとって新たな喜び（子ども達からの刺激）となって、学生もうれしいと思うなどの円環的なサイクルになるからである。

② 質問3 【4月から開催当日の間、「保育発表会」に対する気持ちの変化について】に関し

ては、2013調査においては、「途中からやる気が出てきた」が多かったが、2014調査においては、「はじめからやる気があった」と「途中からやる気が出てきた」間に差が見いだせなかった。

このことの理由として、二つのことが考えられる。ひとつは、2, 3年とも卒業年次で来年取り組む必要がないこと。ふたつ目は、2, 3年生に対して、昨年の「保育発表会」の時より学生の主体的行動に重きを置いたことである。そのことで、学生は自分たちに任されたと認識し、早期の「やる気」に反映していたものと思われる。

③ 質問4【自分のチームが発表しているときの気持ちについて】は、質問1と類似しているが、質問1は「保育発表会」終了後の気持ちであり、質問4は発表しているときの現在進行形での気持ちを聞いているものである。質問1では統計的に「見ている子どもたちが喜んでくれているのを見てうれしい」としていたが、この質問では、視点を「見て貰ってうれしい」（自分たちの成果を外に向ける）と「チームの一体感」（発表するに至る過程の成果）の回答であり、この発表しているとき段階での気持ちとしては、どちらも望ましいことであると思われる。

④ 質問5【「保育発表会」終了後の気持ち】については、「保育発表会」の次の取り組みへの動機づけを聞いたものである。

2013調査においては、「もう一度やりたい（やった方がいい）」と統計的に多く回答したのは3年生で、それとは反対に2014調査において「楽しかったが、来年はやりたくない」と統計的に多く回答したのは1年生であった。

χ^2 検定で十分に意味を示すことが出来なかったが、ここは敢えて割合で示してみた（表14）。統計的に言い切ることはできないが、傾向を見るという点では意味があるものと思われる（セルの下段が割合を示している）。

表14 「保育発表会」終了後の気持ち

2013調査							2014調査						
							学年	ア	イ	ウ	オ	無回答	計
学年	ア	イ	ウ	エ	無回答	計	1	6 18.8	12 37.6	11 34.4	1 3.1	2	32
1	8 23.5	7 20.6	18 52.9	0	1 2.9	34	2	17 48.6	2 5.7	13 37.1	3 8.6	0	35
2	8 34.8	9 39.1	4 17.3	0	2 8.7	23	3	11 45.8	6 25.0	4 16.7	3 12.5	0	24
3	15 68.1	0	5 22.7	2 9.1	0	22	計	34	20	28	7	2	91
計	31	16	27	2	3	79							

① 2013調査における1年生(現2年)

2013調査において最も割合が高かったのは、「やりたい」「やりたくない」どちらとも言えない」が18/33(52.9%)が、2014調査においては3/35(8.6%)と減少してきている。

そして最も割合の低かった「今回は楽しかったが、来年はやりたくない」7/33(20.6%)が、2014調査においては2/35(5.7%)と減少してきている。

また「もう一度やりたい(来年度もやった方がいい)」8/33(23.5%)が、2014調査においては17/35(48.6%)と増加している。

② 2013調査における2年生(現3年)

2013調査において「今回は楽しかったが、来年はやりたくない」9/21(39.1%)が、2014調査においては6/24(25.0%)に減少し、「もう一度やりたい(来年度もやった方がいい)」8/21(34.8%)が、2014調査においては11/24(45.8%)と増加している。

③ 2014調査時点での1年(現1年)

最も割合が高いのは、「今回は楽しかったが、来年はやりたくない」12/32(37.6%)であり、現3年生が2年生の時と同じ割合を示していた。しかし異なる点は、現1年生の方が「「やりたい」「やりたくない」どちらとも言えない」が11/32(34.4%)と高いことである。

2,3年生が「もう一度やりたい」という方向へシフトしている理由として、(1)2,3年とも卒業年次で来年取り組む必要がないこと。(2)2014年度の取り組みとして、教員が学生の主体的な動きに任せ、見守ることを主にしてきた点である。そのために、自分たちに任せられたと認識したことが、「もう一度やりたい」という気持ちに反映していることが考えられる。

それに対して、1年生が「来年はやりたくない」と回答していた理由として、2,3年生は「保育発表会」の意味を理解して取り組んでいたのに対し、「保育発表会」の理解が出来ない状況の中での「保育発表会」だったことが、「来年はやりたくない」という回答につながっていることも考えられる。

⑤ 質問6【あなたにとっての「保育発表会」はどんな意味】については、2013,2014調査ともに「仲間と一緒に取り組めたこと」と回答しており、また学年間においても差がなかった。日常の学びの中で、協力してひとつの子に取り組む経験をする唯一の機会であり、保育士となるものにとって、他者と連携、協力して取り組むことは学生にとって意味のあることだと思われる。

⑥ 質問7【他学年の人から影響】では、日ごろ他学年と交流する機会の少ない中で、一同に同じ目的で取り組むなかで、学年に関係なく相互の良さを学び、取り入れることが出来たということは、保育者になる学生にとっては大切なことである。つまり、子ども、保護者、そして同僚から自分に不十分なことを他者から学ぶということが保育者としての成長という点で必要不可欠になるからである。その意味で、2013,2014調査共に学年相互に自分たちに

不足しているものを学び合えたこと示している。

⑦ 質問8 【「保育発表会」を終えた今、保育士になることへの思い】では、2013、2014調査ともに「保育発表会」への取り組みに対して、時間がかかり、仲間と歯車が合わないなど大変な思いをし、そして作品が出来上がり、それを見た子どもたちがうれしそうにしていた。そして自分たちの取り組んだことへの手ごたえを実感したことが、「大変だけど、保育士になりたい」という気持ちとそして、「保育発表会」が、学生に保育士になりたいという気持ちの再認識する機会ともなっているといえる。

⑧ 質問9 【先輩から後輩への提言（メッセージ）】において、2013、2014調査で共通していることを挙げると次のようになる。

（1）「保育発表会」を何のために行うかという目的を早く理解し、（2）計画的に、（3）協力して取り組むことである。

「保育発表会」は、短期間の思いつきで出来るものでなく、そこに至る時間軸の中で「内容理解」「計画性」、「仲間との協力」などを必要とするものである。これらのことは、将職務に就いた時に求められる Plan-Do-Check（計画—実行—評価）の基本となるものといえる。

V まとめ

今回の調査において、2014年調査における1年生は、2013年調査と比較したとき、「来年はやりたくない」と回答する割合が多かったが、それ以外は、概ね2013、2014調査とも同様の回答傾向にあった。特に「保育士なるには実践力が必要だと改めて思ったが、保育士になりたい」という回答を、2013、2014調査における学生のほとんどがしていた。

この「保育士なるには実践力が必要だと改めて思ったが、保育士になりたい」と回答した学生の気持ちを言い換えると差し詰め以下になるとと思われる。

『自分たちが劇などで演じたことに対して、子ども自身その世界のイメージを自分の中に立ち上げ、（イメージの世界に身を投じ）、その役割と同一化した結果としての気持ちの表れとして、楽しい、うれしいという気持ちを表現したものが笑顔や目の輝きである。そして劇などで演じられた世界の中に子ども自身が遊ぶということが、子どもの生活世界を豊かにするという手ごたえを感じ、保育士になって子どもの育ちを支援する仕事に就きたい』と。

その他に「保育発表会」は、仲間との結びつき、仲間からの学びという経験も重要な意味があると思われる。つまり「保育発表会」は、一人で成し遂げることには限界があり、同僚と力を合わせて取り組むことでシナジー効果が生じること、そして子どもを含めて自分以外の人の考え方や行動から学ぶことが自分の成長につながっていくことを教えてくれる行事ともいえる。

このように考えていくと、「保育発表会」は保育士として、力をつけるために1年に1回、地域の子どもの力を借りて一段と飛躍するための行事と言い換えて良いと思われる。それ故、A専門学校においては「保育発表会」を今後とも継続することは、保育士をめざす学生にとって意味があると思われる。

Ⅵ 課題

三年制から二年制への移行期において「保育発表会」への学生の認識を把握したところ、2014年度入学生（1年生）が、次年度の取り組みに対して「取り組みたくない」と回答している傾向がうかがわれた。そして、それとは反対に、この取り組みを通して改めて保育士になりたいという思いを抱いている。そのことから、この相反する方向性を一方向に向くことが出来るような支援が必要になる。そのために次の三点が考えられる。（1）学生には、自分たちの楽しい行事としてではなく、保育士としての実践力をつけるためのツールであることを説明し、（2）そのために「保育発表会」を外側からあてがわれたものでなく、自主的に仲間同士で話し合い、さらに教員の意見を聞き、そして自分たちで練り直し、創りあげていくものであるという認識を持たせ、（3）さらに教員は、学生がその認識を持ち、生き生きと活動出来るようになるために、学生のレジリエンスを信じ、期待することであると思われる。

Ⅶ 参考文献

ロジャーハート 子ども参画 萌文社

齋藤恵子 本山芳男 「保育発表会」への学生の取り組みについての一考察 2013年度 未稿

資料

「保育発表会」アンケート

このアンケートの目的は、皆さんの率直な気持ちをお聞きし、今後の「保育発表会」をより良きものにすることと、充実した学生生活を過ごすための資料とするためのものです。

個人名は無記名ですが、学年並びに性別による差異を把握する必要があるため、その属性については記載していただきます。

該当するところに○をつけてください

学年 1年 2年 3年

性別 男 女

1 あなたの「にっこり会」に参加した感想について(主なもののひとつに○をつけてください)。

ア 見に来てくれた子どもたちが喜んでくれてうれしかった

イ 忙しさだけのものだった

- ウ クラスがひとつにまとまったこと
- エ 特に何も残らなかった
- オ その他
具体的な内容

2 「保育発表会」でのあなたの役割はなんでしたか？（該当するものが複数ある場合は、主と思うものに◎、それ以外の該当項目に○）

- ア 劇で演じた
- イ 舞台の裏方
- ウ 舞台装置の作成（道具，壁面など）
- エ 特に役はなかった
- オ その他
具体的な内容

3 4月から開催当日の間、「保育発表会」に対する気持ちの変化について聞かせてください。（おもなもののひとつに○）

- ア はじめからやる気があった
- イ はじめからやる気がなかった
理由
- ウ 途中からやる気が出てきた
理由
いつごろですか
- エ その他
具体的な内容

4 自分のチームが発表しているときの気持ちを聞かせてください。（おもなもののひとつに○）

- ア みんなに見てもらってうれしかった
- イ チームの一体感を感じた
- ウ つまらなかった
- エ 何も感じなかった
- オ その他
具体的な内容

5 「保育発表会」終了後の気持ちを聞かせてください。(おもなもののひとつに○)

- ア もう一度やりたい(来年度もやった方がいい)
- イ 今回は楽しかったが、来年はやりたくない
- ウ 「やりたい」「やりたくない」どちらとも言えない
- エ その他
具体的な内容

6 あなたにとっての「保育発表会」はどんな意味がありましたか。(おもなもののひとつに○)

- ア 仲間と一緒に取り組めたこと
- イ 自分が楽しめたと思う
- ウ あまり意味がない
- エ わからない
- オ その他
具体的な内容

7 他学年のことを聞きます。他学年の人から影響を受けたと思いますか。

- ア 強く受けた
具体的な内容
- イ 少し受けた
具体的な内容
- ウ 受けなかった
- エ どちらとも言えない

8 「保育発表会」を終えた今、保育士になることへの思いを聞かせてください。(おもなもののひとつに○)

- ア ますます保育士になりたい気持ちが強くなった
- イ 保育士になるには実践力が必要だと改めて思ったが、保育士になりたい
- ウ 大変なことがわかったので、保育士になりたくない
- エ その他
具体的な内容

9 先輩から後輩への提言(メッセージ): 1年生は次年度入学してくる学生へのものとして記載すること。